澄川喜一　そりとむくり

Sumikawa Kiichi: a Retrospective
Concave and Convex

2020年2月15日(土)－5月24日(日)

横浜美術館

《そりのあるかたちA》2019年　槐、欅、神代欅　210×48.5×38cm　作家蔵
©Sumikawa Kiichi　撮影：江崎義一

千年を越す法隆寺など歴史に残る木造建築は、棟梁が山の木を見て、
山の南側で育った木は建物の南側に、北側で育った木は北側に使ったと言われています。
木は生きているのです。
木の声を聞きながら「そりのあるかたち」を削り出したいと思っています。

澄川 喜一

本展は、戦後日本の抽象彫刻を牽引してきた澄川喜一（すみかわ き いち）の、首都圏の公立美術館で開催される初の大規模個展です。最新作を含む約90点の作品・資料によって、60有余年におよぶ澄川の創作活動の全貌を、あらためて回顧します。

彫刻家をこころざして東京藝術大学に進学した澄川は、塑像（そぞう）を中心とする具象表現の基礎を徹底的に学びました。彫刻専攻科を修了後は藝大で教職につきながら数々の作品を発表、やがて、木や石などの自然素材に対する深い洞察をへて、日本固有の造形美と深く共鳴する抽象彫刻「そりのあるかたち」シリーズに展開します。このテーマは、今なお追究し続ける澄川のライフワークとなっています。

一方で、公共空間における造形の分野でも精力的に作品を発表していきます。東京湾アクアライン川崎人工島「風の塔」や東京スカイツリー®のデザイン監修など、都市の巨大構造物に関わる多彩な仕事でも注目されました。横浜市内においても野外彫刻や多くの公共造形物を手がけ、2013年には横浜文化賞を受賞、横浜市や郷里をはじめとして日本各地で文化貢献に尽くしてきました。

具象彫刻にはじまり、やがて先鋭な抽象彫刻に転じつつ、巨大な野外彫刻や建築分野との協働へと創作の領域をひろげる澄川喜一の決定版ともいえる展覧会です。

本展のみどころ

1. 戦後日本の抽象彫刻のパイオニア、首都圏の公立美術館における初の大規模な回顧展

戦後の抽象彫刻のパイオニアとして、公共の大規模プロジェクトを含む多彩な創作を展開してきた澄川喜一。作家としての活動期間は優に60年を超え、今なお創作意欲はおとろえることを知りません。この展覧会は、澄川喜一の創造の原点、展開と到達点を明らかにする首都圏の公立美術館においては初の大規模な回顧展です。木彫の巨匠・平櫛田中（ひらくしでんちゅう）や塑像の第一人者・菊池一雄から彫刻の基本を学び、具象的な造形を出発点としながら、やがて日本の伝統美に深く共鳴する幾何学的な抽象彫刻「そりのあるかたち」シリーズに転じていく、その理知的な展開を検証します。

2. 美の原点としての「そり」と「むくり」

澄川喜一は、思春期から青年期を過ごした山口県岩国市の名橋・錦帯橋（きんたいきょう）に魅了された若き日の体験を、自らの創作活動の起点として、しばしば語ります。戦禍をまぬがれた木造の橋の複雑な構造美と、反（そ）りと起（むく）りのシンプルなかたちは、澄川が感応する美の原点として、その胸裏に潜在することになります。東京藝術大学における具象表現の追究をふまえ、木という自然素材をみつめ、それに向き合う過程で、木のなかに「そり」と「むくり」という澄川にとっての本質的なかたち・美を見出していきました。今も取り組み続けるライフワーク「そりのあるかたち」シリーズに、澄川芸術の洗練されたシンプルな美が遺憾なく表現されています。
「そり」は下に向かってゆるやかに湾曲する線や面を指し、「むくり」はその逆に上に向かってゆるやかに湾曲する線や面を指します。澄川は「頭の垂れた稲穂の優しい反りや、五重塔など古建築の優美な反りや、緊張感みなぎる日本刀の反り、さらに天空から裾野にかけて霊峰富士が見せる雄大な反り」など、日本の風景や伝統的な造形に見られる多様な「そり」と「むくり」を制作の根底に据えています。

3. 公共空間における巨大な造形

澄川喜一は、1980年代以降、全国各地の野外彫刻を手がけます。環境や景観と切り離すことが出来ない野外彫刻の追究から、やがて建築分野などとの協働による公共空間における造形にも関心をひろげ、都市の巨大構造物に関わる仕事にも精力的に取り組みました。現在では、澄川の屋外彫刻・環境造形の仕事は、北は北海道から南は鹿児島県まで、全国28都道府県120点以上に及びます。ときに自然と対峙し、ときに周辺環境に寄り添い空間の可能性を拓く巨大な造形物も、近年の澄川の創作活動を特徴づけています。

「風の塔」1997年　東京湾アクアライン川崎人工島
撮影：村井修

手前：《TO THE SKY》2012年　御影石
東京スカイツリータウン　©Sumikawa Kiichi／
奥：「東京スカイツリー®」2012年　撮影：内海敏晴

展覧会の構成

プロローグ：はじまりとしての錦帯橋

錦帯橋は、山口県岩国市の錦川にかかる木造の名橋で、5連の橋の中央3つのアーチと石積みの橋脚からなる構造に特色があります。学生時代、この橋に魅了された澄川は、勉学の合間をぬって橋の構造を研究し、写生を重ねました。しかし、1950年に山口県を襲った台風による川の増水で橋は流出。江戸時代より人々の生活を支えてきた橋が流される瞬間を目撃した澄川は、大きな喪失感を抱く一方、石と木の残骸だけとなった橋の美しさに圧倒されます。
本章では、澄川がその創作の原点として言及する錦帯橋について、死と再生の物語からなる作家の回想を交えて紹介します。

撮影者不詳《錦帯橋、周防》1880年代
アルビュメン・シルバー・プリント、手彩色　20.6×27.0cm
横浜美術館蔵（梶川憲雄氏寄贈）

Ⅰ. いしずえ：具象をきわめる

1952年、東京藝術大学彫刻科に入学した澄川は、平櫛田中教室に進み、塑像による具象表現を学びはじめます。田中退官後は、彫刻家・菊池一雄のもとで研鑽を積み、同大学彫刻専攻科を修了した1958年に、「第22回新制作展」に初出品しました。1960年には、古代人の顔を復元する仕事に関わったことを機に、身元不明の人骨から顔を復元する調査にも従事します。同年、仮面を主題にした作品《MASK》で新制作展の新作家賞を受賞。抽象彫刻を自らの表現とすることを決め、過去の具象彫刻と決別します。
本章では、澄川彫刻の礎となる最初期の具象彫刻から、抽象表現への転換期に生み出された「MASK」シリーズのほか、師・平櫛田中や菊池一雄の作品を展覧します。

《S君》1959年　ブロンズ　33×22×27cm
作家蔵（島根県立石見美術館寄託）
©Sumikawa Kiichi　撮影：村井修

《MASK》1967年　欅、桂　149×61×37cm
神奈川県立近代美術館蔵
©Sumikawa Kiichi　撮影：木奥惠三

Ⅱ. 深まり：素材と向き合う

1975年、東京藝術大学の助教授となった澄川は、15年間続けた「MASK」シリーズの更なる発展として、「そり」をテーマとする作品制作に取りかかります。1978年に初めて《そりのあるかたち》を発表し、以降は主に同シリーズを手がけることになりますが、その傍らで「MASK」シリーズや、《木の群れ》《TO THE SKY》といった、「そり」のフォルムを創造性豊かに展開させた抽象彫刻も数多く制作します。ここには、澄川が少年期より抱き続ける「木の面白さ」に対する飽くなき探求心を見ることができます。
本章では、1975年以降に「そりのあるかたち」と並行して制作された多様な主題と素材からなる作品を展示します。

《木の群れ》1992年　チーク、槐、黒御影石　196×240×42cm
島根県立美術館蔵　©Sumikawa Kiichi

III . ひろがり：公共空間を活かす

日本において初めて野外彫刻展が開催された1960年代、公共空間における造形として、彫刻の新しい創作の可能性が模索されました。パブリック・アートの嚆矢（こうし）となるこうした動向を同時代に経験した澄川は、1965年「第1回現代日本彫刻展」に参加、新たな創作領域としての野外彫刻に、積極的に取り組みます。1980年代には、全国各地から制作依頼を受け、屋外設置に適した素材として、山口県産の徳山御影石を用いた数多くの作品を手がけます。「そりのあるかたち」を基本とした澄川の造形は、凛とした存在感をもちながらも周辺の環境と親和し、東京湾アクアライン川崎人工島「風の塔」や、東京スカイツリー®のデザイン監修など、大規模な公共プロジェクトへと広がります。

「鴨池橋」1991年　神奈川県横浜市
撮影：村井修

《金波・銀波》2003年　ステンレス、金箔　みなとみらい線馬車道駅
©Sumikawa Kiichi　撮影：江崎義一

IV. 匠：そりとむくり

1970年代後半以降、長きにわたり追究するテーマとなる「そりのあるかたち」シリーズ。《そりのあるかたち-1》の平櫛田中賞受賞（1979年）は、澄川にとって、その後の創作の方向性を確信させるものとなりました。木の性質を活かした「そり（反り）」と「むくり（起り）」というかたちは、日本の伝統的な造形に息づく曲線として、空間に親和し、深く共鳴します。欅（けやき）、檜（ひのき）、杉、松、樟（くす）、桜など、個々に異なる木の性質と向き合い、対話し生み出されたその造形は、素材の本質を最大限に活かした、無二の美しさをそなえています。
本章では、最新作を含む多様な木の作品をはじめ、石や金属へと素材を転換とした作品もあわせて紹介し、作家が追究し続ける美に迫ります。

《そりのあるかたち-1》1979年　欅　135×260×45cm　東京都現代美術館蔵　©Sumikawa Kiichi　撮影：村井修

経 歴

1931（昭和6）	0歳	島根県鹿足郡六日市町（現・吉賀町）に生まれる。
1951（昭和26）	20歳	山口県立岩国工業高等学校機械科卒業。
1952（昭和27）	21歳	東京藝術大学彫刻科入学。平櫛田中、菊池一雄に塑像を学ぶ。
1958（昭和33）	27歳	新制作展初出品。1959年、1960年に新作家賞受賞。
1963（昭和38）	32歳	新制作協会会員となる。
1967（昭和42）	36歳	東京藝術大学彫刻科講師となる。
1968（昭和43）	37歳	《MASK-AH》で宇部市野外彫刻美術館賞受賞。
1973（昭和48）	42歳	春秋画廊（東京）にて初個展。
1978（昭和53）	47歳	「そりのあるかたち」シリーズ発表。
1979（昭和54）	48歳	《そりのあるかたち-1》で第8回平櫛田中賞受賞。
1981（昭和56）	50歳	東京藝術大学彫刻科教授となる（1995年同学学長に就任）。
1993（平成5）	62歳	タカシマヤ・ニューヨーク・ギャラリーで個展。
1997（平成9）	66歳	東京湾アクアライン川崎人工島「風の塔」デザイン監修。
1998（平成10）	67歳	紫綬褒章授章。翌年、紺綬褒章授章。
2001（平成13）	69歳	東京藝術大学大学美術館にて退官記念展。
2003（平成15）	72歳	恩賜賞・日本芸術院賞受賞。翌年日本芸術院会員に就任。
2006（平成18）	75歳	東京スカイツリー®のデザイン監修者に就任。
2008（平成20）	77歳	文化功労者に顕彰。
2013（平成25）	82歳	横浜文化賞、中国文化賞受賞。
2015（平成27）	84歳	島根県立石見美術館で回顧展。

岩国工業高等学校卒業　1951年

菊池一雄のアトリエにて（後列左）　1959年頃

東京藝術大学副手時代　1959年頃

作家プロフィール

澄川 喜一（すみかわ きいち）　Sumikawa Kiichi

戦後において彫刻および公共造形の分野を牽引してきた彫刻家。島根県鹿足郡六日市町（現・吉賀町）に生まれ、山口県立岩国工業高等学校在学中に美術を志す。東京藝術大学彫刻科で平櫛田中および菊池一雄に学び、具象彫刻から抽象彫刻、さらには新たな創作領域としての野外彫刻をはじめ、公共空間における造形の分野も切り拓いた。
1970年代後半より「そりのあるかたち」シリーズを展開。自然と対話し、日本の伝統と美意識に根ざしたその造形は、澄川芸術の真骨頂となる。東京藝術大学学長（1995年～2001年）をはじめ、教育者としても多大な業績を残すとともに、公共プロジェクトや文化行政にも貢献。文化功労者に顕彰され、1998年紫綬褒章、1999年紺綬褒章など授章。

撮影：内海敏晴

トピックス

板橋区立美術館「物語の庭　深井 隆　彫刻展」と相互割引実施

本展と板橋区立美術館「物語の庭　深井 隆　彫刻展」は相互割引を実施します。東京藝術大学で澄川喜一に師事し、現代日本を代表する彫刻家のひとりである深井隆。この機会に日本の木彫界を代表する2人の展覧会をぜひ併せてご覧ください。

[対象展覧会]
板橋区立美術館
「物語の庭　深井 隆　彫刻展」
(2020年3月7日 [土] ～5月10日 [日])

[割引内容]
いずれか一方の観覧券（半券・前売券含む）を他方の券売所でご提示いただくと、「澄川喜一展」の当日観覧料を200円割引、「深井隆展」の当日観覧料を団体料金でご購入いただけます。 ※1枚につき1名様、1回限り有効 ※その他の割引との併用は出来ません

横浜市内をめぐって澄川喜一の世界を楽しむ！

本展会期中に、横浜髙島屋7階美術画廊にて澄川喜一の個展が開催されます。また、横浜市内には澄川喜一がデザイン監修した架橋や公共彫刻等が複数あります。本展と共に横浜市内にひろがる澄川喜一の世界をお楽しみください。

[個展]
「澄川　喜一 展　ーそりのあるかたちー」
会期：2020年3月4日(水) ～10日（火）　10：00～20：00
※最終日は16:00まで
会場：横浜髙島屋7階美術画廊
お問合せ：045-311-5111

[横浜市内公共造形・彫刻]

《飛翔》	1981年	神奈川県庁新庁舎（横浜市中区）
「万里橋」	1988年	帷子川（横浜市西区）
「一本橋」	1988年	大岡川（横浜市南区）
「道慶橋」	1989年	大岡川（横浜市南区）
「鴨池橋」	1991年	鶴見川（横浜市緑区）
《リチャード・ヘンリー・ブラントン記念像》	1991年	横浜公園（横浜市中区）
《Wing of Phoenix》	1991年	南部斎場（横浜市金沢区）
《種》（下村観山碑）	1998年	本牧山頂公園（横浜市中区）
《金波・銀波》	2003年	みなとみらい線馬車道駅（横浜市中区）

関連イベント

1. 記念対談　澄川喜一 × 深井隆

澄川喜一と東京藝術大学で澄川に師事した彫刻家・深井隆氏が、木を素材に制作を続ける両者の作品や、大学時代のエピソードなどについて語ります。

講師：澄川喜一、深井隆（彫刻家、東京藝術大学名誉教授）
日時：2020年2月22日（土）14:00～15:30（13:30開場）
会場：レクチャーホール（定員220名、先着順）
参加費：無料（事前申込不要）

2. 記念鼎談　澄川喜一 × 内藤廣 × 逢坂恵理子

澄川喜一がセンター長を務める島根県芸術文化センター「グラントワ」や、作品《金波・銀波》が設置されたみなとみらい線馬車道駅を手がけた建築家・内藤廣氏をお招きし、建築と公共空間における美術作品について語ります。

講師：澄川喜一×内藤廣（建築家）×逢坂恵理子（横浜美術館館長）
日時：2020年3月20日（金・祝）14:00～15:30（13:30開場）
会場：レクチャーホール（定員220名、先着順）
参加費：無料（事前申込不要）

3. 澄川喜一によるギャラリートーク

作家自らが展示室にて作品や本展について語ります。

日時：2020年5月2日（土）14:00～15:00
会場：企画展示室
参加費：無料（事前申込不要、当日有効の観覧券が必要）

4. 学芸員によるギャラリートーク

本展担当学芸員3名がそれぞれの視点から展覧会をご案内します。

日時： 2020年3月7日（土）、4月4日（土）、5月9日（土）14:00～14:30
会場：企画展示室
参加費：無料（事前申込不要、当日有効の観覧券が必要）

5. ワークショップ　「抽象彫刻の魅力『澄川喜一の世界』」

作家自身によるレクチャーと展示室での作品鑑賞を通して、澄川の抽象彫刻の魅力に迫ります。

講師：澄川喜一
日時：2020年2月23日（日・祝）14:00～16:00
会場：市民のアトリエ、企画展展示室
対象・定員：12歳以上・20名（事前申込、抽選）
参加費：2,500円（本展観覧券付）
申込方法：ウェブサイト申込フォーム、または往復はがき　※申込受付中
申込締切：2020年2月3日（月）※必着

YOKOHAMA MUSEUM OF ART

澄川喜一　そりとむくり

Sumikawa Kiichi: a Retrospective Concave and Convex

会期　2020年2月15日（土）- 5月24日（日）

開館時間　10：00〜18：00（入館は17：30まで）
※5月の金曜・土曜は20：00まで開館（入館は19:30まで）

休館日　木曜日

主　催：横浜美術館（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）
日本経済新聞社、神奈川新聞社、tvk（テレビ神奈川）

協　力：みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

チケット

	当　日	前　売	団　体
先行ペア券（2 枚 1 セット）	—	2,000円	—
一般	1,500円	1,300円	1,400円
大学・高校生	900円	700円	800円
中学生	600円	400円	500円
小学生以下	無 料	—	—
65 歳以上 （要証明書、美術館券売所でのみ対応）	1,400円	—	—

チケット取扱い
横浜美術館（前売りはミュージアムショップ）
セブンチケット（セブン - イレブン店内マルチコピー機 もしくはウェブサイト）
イープラス（ファミリーマート店内 Fami ポート もしくはウェブサイト）
※電子チケット「スマチケ」もご利用いただけます。

※先行ペア券販売期間：2019年10月12日（土）−11月22日（金）
※前売券販売期間：2019年11月23日（土・祝）−2月14日（金）
※有料20名以上の団体料金（要事前予約）
※団体は有料20名以上（要事前予約、美術館券売所でのみ販売）
※毎週土曜日は高校生以下無料（要生徒手帳、学生証）
※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方（1名）は無料
※観覧当日に限り企画展の観覧券で「横浜美術館コレクション展」も観覧可
※その他の割引料金については別途お問合せください。

横浜美術館
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 3-4-1
TEL: 045-221-0300　FAX: 045-221-0317
https://yokohama.art.museum

プレスリリースお問合せ
横浜美術館 広報担当（藤井、山本、梅澤、桑原）
TEL: 045-221-0319　FAX: 045-221-0317
E-mail: pr-yma@yaf.or.jp